

都市周縁に生きる日雇労働者の文化活動に関する社会教育研究：大阪・釜ヶ崎を事例に

中山，博晶

<https://hdl.handle.net/2324/7363560>

出版情報：Kyushu University, 2024, 博士（教育学）, 課程博士
バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)



氏 名	中山 博晶			
論 文 名	都市周縁に生きる日雇労働者の文化活動に関する社会教育研究 - 大阪・釜ヶ崎を事例に -			
論文調査委員	主 査	九州大学人間環境学研究院	教授	岡 幸江
	副 査	九州大学人間環境学研究院	教授	藤田雄飛
	副 査	九州大学人間環境学研究院	教授	飯嶋秀治
	副 査	九州大学人間環境学研究院	教授	江口 潔

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、都市周縁に生きる日雇労働者の文化活動の展開及びそれを支える人々・実践にみられるオルタナティブな包摂のあり方を実証的に明らかにしようとした社会教育学研究である。具体的には大阪・釜ヶ崎の日雇労働者の生活経験や習慣に関わる表現活動について、時代・主体にわたる多層的なアプローチが試みられている。

従来、社会的排除と包摂をめぐることは、福祉はもとより社会教育研究においても、排除された当事者の自立や社会参加への支援として描かれがちであった。これに対して本論は包摂される側の「主体性」が不可視化されることを問題視し、これを当事者の自己形成とその基盤となるコミュニティのありかたにおいて、描き出そうとしている。

例えば西成市民館で活動するアマチュア劇団「くるま座」（1953～不明）の事例からは、日雇労働者に適応を促す側面と抑圧的な社会構造を意識化する側面の両面でその教育的性格を描いている。日雇労働者らが編纂したミニコミ誌『労務者渡世』（1974-1985）の掲載内容分析からは、生活文化や歴史を描きながら、周縁性に特徴づけられた「労務者」アイデンティティが創造されていたことを明らかにした。また本論はアート系NPOココルームの文化活動に参加した日雇労働者の語りを通して、社会的に排除・周縁化されてもなお生きてきた「主体性」が、文化活動を介して自らの存在を確かめ、承認される一連の営みを描き出す。一方支える人々に注目すれば、彼らは日雇労働者の経験や存在に触れるなかで、主流社会の価値観と対峙し相対化する、彼らの「弱さ」に価値を見出す。そこから展望されるのはよりよい支援ではなく、日雇労働者の労働・生活経験を中心として、存在を相互承認することが可能なコミュニティである。本論はこうした在り様に、オルタナティブな包摂をみる。

本論は社会教育学研究、特に社会的排除と社会教育また教育福祉の議論に対して、周縁に生きる人々と支える人々による協働創造の地域像およびそこにこそたちあがる主体像を、5 年間にわたる丁寧なフィールドワークおよびその分析から鋭く提起するものである。また本論の主体性／包摂論は、教育学をこえて議論がひらかれており、発展が期待される。

よって、本論文は博士（教育学）の学位に値するものと認める。